THE ENPEROE OF JUSTICE

愚者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥ　ＥＮＰＥＲＯＥ　ＯＦ　ＪＵＳＴＩＣＥ

【Ｎコード】
Ｎ３４５０Ｉ

【作者名】
愚者

【あらすじ】
とある世界の中にバレルという国があり、そこはずっと冬という状況にあった
原因はとある州の市長がその状態にしたことがわかった
そして市長は州を魔法で吹っ飛ばした
市長を抹殺しようとしたが逃げられてしまう
王宮に戻り次の任務に備えることになった主人公アリス
また彼女には長い旅が待っている

旅の準備～1（前書き）

週1くらいのペースであげれたらいい方だと思います

旅の準備～1

ファットマン州が吹っ飛んでから半年くらいたった

私は王宮ＳＳＳ隊の隊長をしている、名前はアリス・レンフィールド皆からはアリスと呼ばれている

「そろそろ連れていく奴決めなきゃな」

半年前に逃亡したファットマン州の市長を完全抹殺をしなくてはならない

だが今回は仲間を連れていかなくてはいけないが誰を連れていくか悩んでいる

「強い奴のがいいな～」

それだと軍隊からは抜けない、軍全部でかかってきても勝ったことがあったからだ

じゃあ知り合いをあたるしかない

とりあえず城下町に行くか

旅の準備～1（後書き）

駄作ですまなかったな
次は頑張るよ
感想を書いてくれれば制作スピードが上がる　か　も

旅の準備～2（前書き）

話を短めにしないとペース守れないんだ

旅の準備～2

ここは町の外れにあるボロい酒場いつもここに入り浸っている二人組がいるはず

「こんにちわ～」

中に入ると客はいないしマスターも新聞を読んでいる一番奥のテーブルに二人がいた、片方は背中にデカイ剣を背負っている難しい顔した赤い髪の男、もう片方は拳銃をテーブルに置いて笑いながらカードをいじっている青い髪の男、カードで遊んでいるようだ

赤い髪の男が

「スリーカード、これ勝ちだろ？」

すると青い髪の男は

「フルハウス、俺の勝ちだ」

「ざっけんな！お前イカサマしただろ！」

「お前がふざけてんだろ！こんなきれいな勝ち方まず無いだろ！」

喧嘩になりそうなので話しかけることにした

「お前ら喧嘩になりなるんだったら初めからするなよ」

初めに赤い髪の男が反応した

「うっせ！…ん？アリスじゃねーか久しぶりだな」

青い髪の男も気づいた

「おお！マジにアリスだな、王様は元気かい？」

「あいつが病気になったとこ見たことあるか？」

「無いな、でアリスは俺達になんか用でもあんのか？」

「ああ、お前らレベルの強さのやつらを連れてってずっと冬の原因のやつを殺差にきゃいけない」

「お前だけで十分だろ、それに連れてくなら王様つれていけばすぐ終わるだろ」

「王様はいきたくないんだって」

「ふーん、報酬は？」

「許す限りの好きなものやるって」

「よし！じゃあついてってやるよ」

交渉は成功したな

この二人は私と王様と同級生である

赤い髪がシュバルツ・マーフィン、背中のデカイ剣がトレードマークである

青い髪がシーザー・ドルビン、常に拳銃を常備している

二人は元兵士だったがムカつく上官を殴ってクビになった

「他は誰か連れてくのか？」

実はもう一人連れてく予定のやつがいるのだが来てくれるかどうかはわからない

旅の準備～2（後書き）

仕事が遅い？今右足すごい痛いから勘弁してくださいよ
感想に書いた意見は参考にしていくので悪い点でいっぱいだから書いていってね
あと質問も感想に書いていってね

旅の準備～3（前書き）

さすが俺、こんな早い仕事他に無いな

旅の準備～3

酒場から出てもシュバルツとシーザーはまだ後ろでさっきのカードの言い争いをしていた

「まずお前の配り方が変だったんだよ、イカサマ決定だな」

「頭沸いてんのか？いつもあんな感じだろうが、言いがかりすんな」

うるさい・・・てか周りの目が超恥ずかしい

「お前ら少し黙ってて・・・恥ずかしいから・・・」

聞く耳は無いらしい

そんなこんなで目的の場所に着いた

ここは王立図書館である、ここにまた同級生がいるはずである

「お前らうるさいからここで待ってて」

私は図書館の中に入った

中は王立というだけあって広い、私は本にそこまで愛着は無いので滅多に来ることはない

「どこにいるかな～？」

確かここで生活しているはずだが、探すしかない

しばらく探してたら本を山積みにして読書をしている色白の幼女が

いた

「いた！」

私は思わず叫んでしまい幼女がにらみつけてきた
この青い髪の幼女の名前はムーン・レイニース、稀に見る天才幼女である、同級生なのも飛び級してきたことでだ、確か今は１４才のはずだか身長が伸びず幼女とよく間違われる、だが七大賢者の１人という大物である

ムーンがずっとにらんでてここが図書館ということを思い出した

「・・・ごめん」

「・・・・・何の用？」

「ずっと冬の原因を殺しに・・・」

「却下」

即答である、だが諦めるには惜しい戦力である
そのとき表で言い争いをしていた2人がこっちに来た、そしてムーンがシーザーを見て顔を赤くするのを見てしまった、食ってしまいたいくらいの可愛さに思わずアリスはムーンに抱きついた、ムーンは赤く固まったままである
シーザーがだるい顔して言った

「アリス～まだなのかよ、待ちくたびれたぜ」

この質問に対してアリスは

「（はあぁー、可愛いのう可愛いのう）」

固まったままのムーンに頬擦りをしていた

「おい！アリス！聞いてんのか？」

「はっ・・・あーうん、行きたくないって」

その時ムーンが口を開いた

「・・・やっぱり行ってあげても・・・いいよ・・・・」

その言葉を聞いたときアリスは大きくガッツポーズした

それを見たシュバルツは

「何してんのお前？」

こう言うしかなかった

旅の準備～3（後書き）

あとキャラの細かい設定は聞かないと教えません
ちゃんと設定はノートに書いとく予定です

旅の準備～４（前書き）

読んでいる人は少ないが１と０では違う
一人でも読んでいる人がいるなら俺は更新を続ける

旅の準備～4

図書館からでて一旦城に戻って王様に報告しなくてはならないらしい
シーザーがアリスに聞いてきた
「そういやターゲットの情報とかは？」

「城で言う」

「ふーん、強いのか？」

「けっこう強いよ、七大賢者並だな」

「殺りがいがあるな」

シーザーが笑った、どす黒い笑みだった
ムーンは俯いている。多分シーザーの事を意識してるんだろう・・・
・・可愛い・・・
しばらく空気だったシュバルツが口を開いた
「てか俺今すげぇ眠くてすげぇだるい。略してすげぇねるいんだが」
シュバルツは返事をするとうるさいので無視することに決めた

その頃王様は

「なぁ大臣さん、冬の原因排除ってけっこうでかい仕事だと思うんだけど。これ俺も行けば国民の信頼度も上がると思うんだが」

大臣が呆れ顔で答えた

「仕事が優先でございます。それに王様が出て行くと城はどうなるのですか？一瞬で壊滅状態になりますぞ。何しろ・・・」

「おい、それから先は国家機密だぞ。注意しろ」

大臣は慌てて口を閉じた

「失礼しました、今後気を付けます」

「ああ、そうしてくれ。今のミスは俺が冬の原因排除しにいってもいいと許可してくれたら・・・」

「ダメでございます」

やっぱりダメだった、また新しい作戦を考えなければ・・・閃いた

「なあ大臣さ・・・」

その時アリス達が玉座の間にはいってきた

「ただいま～」

「お久～王様～」

「超ねるい・・・」

「・・・・・」

すると王様は不機嫌そうに「おう」とだけ答えた
その反応を疑問に思ってアリスは大臣に聞いてみた

「王様不機嫌だけどなんかあったの？」

「いいえ、なにもございません」

階級が下の私にも敬語を使ってくれるいい人だし多分悪いのは王様
の方だと直感したが言ったらキレられそうなので言わないことにした
シュバルツが言った

「てか王様が悪かったんじゃね」

こいつ空気読めよ！？
王様は多分すげぇ形相してるに違いない
空気の読めないシュバルツがまた言った

「あとなんでずっと甲冑つけてんの？」

そこを突っ込むか！？
なんでこんな空気読めないかな
王様はというと玉座から立ち・・・シュバルツまで歩み寄って・・・
シュバルツを殴って・・・また玉座に座った
・・・・・なんか言えよ！？
シュバルツは何が起こったかわからないような顔をしている
シーザーと大臣は呆れてる
ムーンはさっき書斎に行った

シュバルツがキレたようで王様のそばまで歩いていくシュバルツが王様を殴ったと思ったらまさかのカウンターが一閃、シュバルツが吹っ飛ばされる
両方キレてしまっているので迂闊に近づけない
しかしなんで人の喧嘩は見ててこんなにも面白いか不思議だ
シーザーが言った

「どっちが勝つか賭けようぜ、俺は王様な」

「では私はシュバルツ殿で」

「じゃあ私は引き分けで」

喧嘩は決着したらしい
シュバルツが倒れて王様が空めがけてガッツポーズをして気絶した
引き分けかよと大臣さんとシーザーが呟いた

「はい、私の勝ち・・・じゃなぁーーい!? なんで喧嘩で賭けしてんの? 任務の説明とかは?」

大臣さんが言った

「ご心配なく、ちゃんと資料にしておきました」

それを聞き安心した

続けて大臣さんが言った

「報酬の方は任務が終了して無事戻ってきたときに渡します。あと旅の日用品や食糧はこのリュックのなかにあります」

じゃあもう出発出来るということだ

書斎からムーンを呼び戻し城から出る。旅は今から始まる・・・・・

シュバルツを忘れた・・・

旅の準備～４（後書き）

小説を書いてるやつはな、更新しようと思ったときすでに「行動」は終わっているんだ！

だったら良いのにね

第一話　役者（前書き）

少し遅れましたね
てか自分の作品は話が短い感じですね
話しも薄いのに・・・

第一話　役者

シュバルツを引き取ってからもう一時間ほどたつ太陽は既に真上だ
シュバルツがダルそうに言った
「ちょう眠いしちょうダルい略してちょうねるい」

全員でスルーするとその時ケンタウルスらしき生物が一匹シュバルツに襲いかかった・・・がシュバルツはそれを一瞬で三枚におろした
アリスは三枚におろされたケンタロスの首に紋章があることに気づいた

「これ確か半年前のドラゴンにもあったわね。その時は気にしなかったけど」

するとムーンが　ああ　と頷いた

「それは召喚獣の紋章、人によって紋は違うの。つまりこれもターゲットの刺客ね」

そこで不思議に思った

「じゃあどうしてあんな弱いのに襲わせたんだろ？」

これもムーンが答えてくれた

「シュバルツの情報が欲しかったんじゃない？それか一番アホそうだから一人だけ狙われたとか」

シュバルツを見たらシーザーに自慢気に何か言っていた

「見てみこれ、一瞬で三枚だぜ。いやぁお前じゃ多分一瞬はきつかったんじゃね？」

シーザーはテキトーな相槌を打っていた

「「後者かもね」」

ムーンとハモった

太陽はもう西に沈み夜になりかけていた

シュバルツが言った

「もう夜だしここで野宿でよくね？」

全員が　えっ？なんで　と言いたげな表情になった

「いやおばあちゃんがよく話してたんだけど夜も移動してる旅人はたくさんの獣とかに襲われるらしい」

シーザーが納得した、ということはムーンも合わせるだろう。多数決で野宿決定

テントを張り既に寝るだけになった。見張りはじゃんけんで決めた

シュバルツになった。つくづく神に見放されてる感じである
そして全員が眠りについた

朝だ、なにも無かったから熟睡できた
きっとシュバルツが襲ってきた奴を蹴散らしてくれたのだろう。その思いは一瞬で裏切られてた・・・
すぐ横でシュバルツが寝ていた・・・

シュバルツを起こしてから説教タイムにはいった

「・・・さて、言いたいことは大体言わしてもらったけど、なんか言い訳はある？」

シュバルツを見たら寝ていた・・・ぶっ殺す！！
さすがにヤバいと思ったのかシーザーがアリスを止めにはいった。
アリスをホールドする。相変わらずの馬鹿力である

「シーザー、離せ、殺されたいか？」

「いや殺されたくないが落ち着け」

「十分落ち着いてる、こいつ殺せばもっと落ち着くから」

さすがに馬鹿力が売りのアリスには力では勝てない。だんだんホールドが崩れてきた

「いやいやいやいや、ほらバナナやるから」

「いらないから、殺されたいか」

騒ぎでやっとムーンが起きてきた、そして現状をすぐに把握した
アリスを魔法で硬直させてアリスが大人しくなるのを待つことにした

「いやぁマジで死ぬかと思ったぜ、ムーンサンキューな」

シーザーの礼を受けたムーンは首を横に振った

「私はなにもしてない、シーザーがホールドしていなかったら手遅れだったし。お礼はいらない」

シーザーは言った

「お礼はどれだけあっても困らないんだからよ、素直に受けとけ」

そしてムーンのやさしく頭を撫でる、そして頬に軽くキスをした
ムーンは一気に真っ赤になった。赤いムーンを見てシーザーは笑った
その優しい世界を優しい目で見ていたのはアリスとシュバルツだった

第一話　役者（後書き）

読んでくれる人に感謝感謝

第二話　バナナはおやつ（前書き）

非常に遅れたのも学校がテストやらなんやらで忙しかったからだし、
俺は悪くないし

第二話　バナナはおやつ

ここはすでに王宮から一番近い小さな町だ名前はノーベル
今はこの町の貸家にいる

しんとした雰囲気、ここまで来るのにシュバルツは三回ほど死にかけた
そのせいで別に急いでいるわけではないが1週間位遅れた

「シュバルツはなんでこんな死にかけたの？」

「さあ？俺が弱いわけないしな」

そう死にかけた時はいつもなにか事故でだ

シーザーが捨てたバナナの皮でこけて谷から落ちたり

シーザーを転ばそうとしてバナナの皮をセットしてシーザーがこけてシーザーの暴発した弾丸に貫かれたり

シーザーの捨てたバナナの皮で寝ているアリスの上に覆い被さる形にこけてとある川を渡りそうになったり

そしてアリスは聞いた

「じゃあなんで？」

すると返事は

「いや実のところシーザーが一番悪い！」
「シ～ザ～！」
シーザーは焦る様子もなく言った
「むしろアリスが一番悪い」
「あ～た～し～！ってなんであたし！？」
「バナナはおやつに入ると断言したからな」
それは城下町をでる前に少し買い物してシーザーはアリスに質問した
「バナナはおやつに入りますか？」
とその解答は3分悩んで思いっきり言った「入る！！」
するとシーザーは食料保存の袋にバナナを山ほど積めていた
その時は「どんだけバナナ好きなんだよ」としか思って無かったが、
まさかこんなことになるとは

全員がため息をついたその時である、
外から断末魔な叫びがした
急いで貸家から外にでた

外にはなにかいるって感じはしない、というかこの町の住人すらいない感じだ

「おかしいな、来たときは盆踊り踊ってるような奴までいたのに」

いやなんで踊ってるんだよ

そして悲鳴のあった場所についたが暗くてよくわからないが耳を澄ませると死ぬ一歩手前独特の呼吸が聞こえた

そして下半身が無くなった死にかけの少女がいた

「はやく助けないと！」

私は叫んだ、ムーンが少女に近づき治療魔法をかけようとした・・・が、ムーンが何かに気づいたそして叫んだ

「皆伏せて！」

だが動く前に体が勝手に地に伏せた。シーザーやシュバルツも同じだ

ムーンは少女に向かって一瞬何か唱えて伏せた

次の瞬間辺りが昼間のように明るくなった

眩しさで目が眩んだ

そして辺りがまた夜の静けさを取り戻す

目が再び暗さに慣れてきていた、少女がいたところは地面が焼け焦げ２０ｍ位の穴ができていた

何が起きたか理解できなかったのでムーンに聞いてみた

「今何が起きたの？あの子は？」
息づかいの荒いムーンが言った
「説明は貸家に戻ってからさせて…」
とりあえず貸家に戻ることにした

貸家に戻りムーンをベッドに寝かせた
そしてまた聞いた
「アレはなんだったの？」

ムーンは息を整えて言った
「爆発魔法よ、あれぐらいだと半径１ｋｍ位は巻き込まれてたわ」
シーザーが口を開いた
「なんであの子が爆発したんだ？」
それにも答えてくれた
「あの子に近づき治療魔法をかけたらそれがトリガー。」

次はシュバルツが聞いた

「あの子は死んだのか？」

ムーンは眠そうに言った

「心配しなくてもダミーよ、ごめん、少し疲れたから休ませて」

ということは私達を伏せさせたのもムーンというわけか、まったくもって天才である

とりあえずシュバルツと私で町の様子を見に行くことにした、とりあえず町の人を探さなければいけないがムーンを置いていくわけにはいかないのでシーザーを待機させておいた

シュバルツが口を開く

「だがなんで町の人間がいないんだ」

そこがまだわからない

「家の中も見てみようか」

目の前の家に入っていった

慎重に探索していたら台所になぜか服が落ちていた

「なんでこんなところに服？」

また探索をしたら書斎らしき部屋にも服があった、タンスも無いのに
この謎を解くには一旦戻った方がいいようだ
とりあえずシュバルツを呼ぶ

「どうした？なんか解ったのか？」

「いや、だけど単独はヤバい気がするし一旦シーザー達のところに
戻ろう」

「んーわかった」

その家を後にした

貸家に戻るとシーザーがムーンの寝ているベッドの脇に座わり待機
していた

「お疲れ、シーザー」

「・・・・・」

「シーザー？寝てんの？」

「・・俺のバナナについてこれるかな？・・・・・」

「よし、寝てるな」

「なんだ寝てるのか焦らせやがって」

第二話　バナナはおやつ（後書き）

感想は駄作の一言で十分誉め言葉

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3450i/

THE ENPEROE OF JUSTICE

2010年10月11日03時28分発行